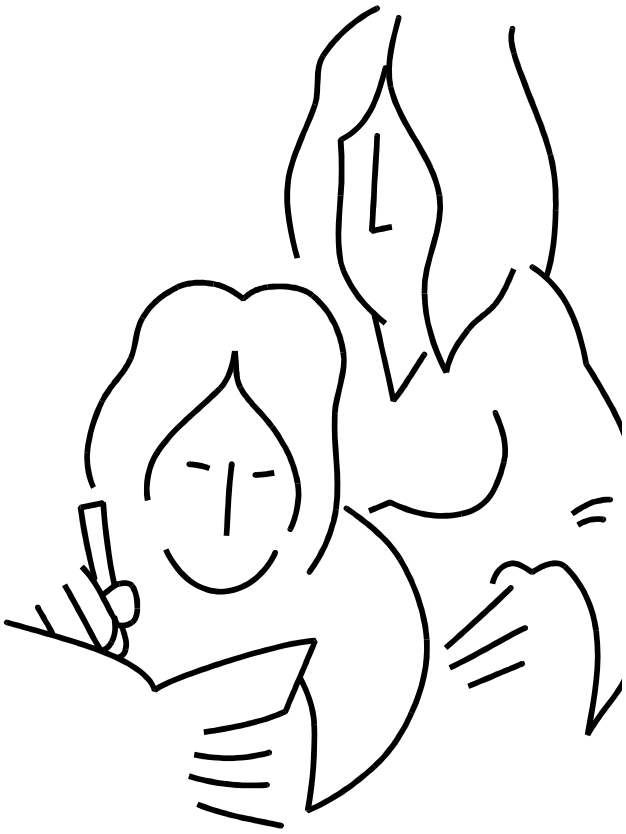
はじめの一歩

松本康子

1才半にもならない長女を連れて渡米してきたのが、30年近く前のことだ。この子は、1日も早くアメリカ社会に馴染むためにと、その年齢で学校へ行かされた。

こちらに着いて間もない頃、いろいろお世話になった方（Kさんとする）から受けたアドバイス（おどし?）が、アメリカでの私の子育ての方向を決めてしまった。それは、「人に頼らず、自分の手で子どもを育てる」ということだった。

Kさんのアドバイスというのが、何かの話の中で、私が夫の留学に伴って渡米してきたため、ビザの関係で専業主婦だというのがきっかけだったのだろう。Kさんは、アメリカではよほどの事がないかぎり、母親が主婦専業でいられるのは子どものためには恵まれていると言ったのだ。それは、「自分の孫は、両親ともに仕事を持っているため、生まれて間もない頃から人手に頼って育ててもらっている」という、理由からだった。「子どもが泣いても抱いてもらえず、構ってももらえず泣かせっぱなし」「熱があっても預けに行かなければならない」辛い選択だと。また、もっとも現実的な問題として、「子どもを預ける費用も大きな負担となり、何のために働くのか分からない」と言われ、渡米前まで勤めていた私は、びっくりした。自分でまだ運転もし始めていなかった頃でピンとこなかったが、「送り迎えが本当に一番頭の痛いことだ」とも聞かされた。



どんな人がKさんのお孫さんを世話しているのかは聞かなかったが、預かる人の人格の問題でなく、それが普通の状況だと理解されているような社会なら、子を持つ親としては、胸の痛くなるような話ではないか。アメリカ社会で働く親を持つ子ども達の、こんなネガティブな状況ばかりを聞かされ、それでなくても言葉の問題があるのに、その上に、何も考えていなかった海外での子育てまで大変そうだと、ますます不安をつのらせてしまった。

この話が印象的だったところへ、夫が、長女を「学校へ行かせるよ」と言い出した。夫曰く、「外で子ども達が遊んでるの見たことないでしょう?」「日本では、子どもは玄関を出たら当たり前に遊び相手を見つけて勝手に遊んでいるが（30年前の日本の話）、アメリカは車社会で、子どもを遊ばせるにも、毎日、公園まで車で連れて行かなくちゃいけない」「アメリカ人は、子どもの社会性を養うために、小さい頃から幼稚園へ行かせるらしいよ」などが、主な理由だった。また、「大学の関係者の子ども達だけを受け入れる幼稚園がこの寮の近くにあるらしいから、調べてそこへ入れよう」と、一人で納得してしまっている。

今考えてみると、アメリカの事情を何も知らなかったため、私が過剰に受け取った嫌いもあったのだろうが、「泣いても・・・」というフレーズが頭の中をこだました。夫の言い分はいちいちもっともではあったが、母親が専業主婦で家にいるのに、「言葉もまだ分からない赤ちゃんのような子どもを、なぜわざわざ…」と、大いに反発した。延々とKさん